

題字
大島文雄先生

じんぶん



『哲学の慰め』の仏訳

『ソリロキア』と続編の
『魂の不死について』の
羅英対訳

松崎一平による『告白』の紹介

- ・松崎一平『アウグスティヌス『告白』
—〈わたし〉を語ること……—』岩波書店、2009年
- ・Saint Augustine, *Soliloquies and Immortality of the Soul*,
with an Introduction, translation and Commentary by G.
Watson, Aris & Phillips, 1990
- ・Boèce, *La Consolation de Philosophie*, Introduction,
traduction et notes par Jean-Yves Guillaumin, Les
Belles Lettres, 2002

総会記念講演

7/6(土) 総会 13:30~
講演 14:40~
場所 ボルファートとやま

内省的探究における
超越的人格の出現について

松崎 一平

アウグスティヌス（354-430）は『告白』第八巻で、386年夏、ミラノでのカトリック・キリスト教への回心を回想しています。それによると、厳しい内省のさなかに「貞潔」が出現し、彼を力強く回心へと誘います。『ソリロキア』では、どこからか出現した「理性」が、独り思索するアウグスティヌスと対話を試み彼を導きます。『哲学の慰め』では、牢獄にあっておのれの運命を嘆くボエティウス（480頃-524頃）のまえに「哲学」が出現して議論を導きます。内省的探究（あるいは葛藤）におけるこのような超越的人格（みな女性です）の出現の意味を考察し、西欧的知の特質の一つというべき、内的探究の枠組みをいくらかでも明らかにすることをめざします。

独和辞典事情 富山大学人文学部長 黒田 廉

過渡期の文理学部・人文学部 岡本 明

大学での学びに感謝 谷崎善英

研究室から／心理学 喜田裕子

教員という仕事の醍醐味 高野靖彦

研究室から／ロシア語 武田昭文

第4回 人文学部の歩み 入江幸二

総会、人文の集い、卒業祝賀会報告、新刊案内 他

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話：(076) 445-6143

FAX：(076) 445-6142

E-mail：
alumni1@hmt.u-toyama.ac.jp

独和辞典事情

富山大学人文学部長 黒田 廉



辞書が好きである。

機会あって、十数年前から編集委員の一人として辞書づくりに携わっている。専門がら、執筆するのは独和辞典である。見出し語について適切な訳語を考え、必要なら用例とその訳も与える。ぴたりとした訳語が見つかるとうれしい。他の辞書の間違いを発見すると、思わず「いやっ」としてしまふ（実は世間が思っている以上に辞書には間違いが多い）。他人から見ると、そんなことの何が楽しいのかと思えるかもしれない。大学の仕事は増えても、辞書の仕事はしてしまふ。数行の記述で済

む語も多く、ちよつとしたすき間時間にできるのがまたいい。気がつくとも、本来の仕事を放っておいて、訳語を吟味し現実逃避している自分がいる（それでも執筆ペースはかなり落ちていくのである）。

現在、独和辞典をめぐる状況は厳しい。

大学での履修状況からも明らかのように、ドイツ語学習者は減少しており、市場は縮小している。出版社も辞書にかけられる予算は限られてくる。新規出版はもとより、既存辞書の改訂すら、なかなかままならない。執筆者の確保も楽ではない。そもそもドイツ語教員が減っている。大学の業務も多忙化しており、また業績主義のため（辞書執筆は多大な労力を伴う割にはたいした業績にならない）、現役の教員はなかなか喜んで手を挙げない。実は退職者が貴重な働き手であったりする。

実際に執筆する上でも従来とは異なる難しさがある。かつては複数の独和辞典を比較して、競合他社の独和辞典も参考にしながら、見出し語を選び、語義・用例等を記述していけばよかった（他の『〇和辞典』にもおそらく当てはまるが、独和辞典は多分に母語による辞典の翻訳であった）。個人的に収集した語、用例を入れるということも、もちろんあった。ただ、それは全体の数からみれば、かなり少なかった。いまはインターネットがある。コーパス（言語資料をデジタルデータで大量に蓄積しコンピュータ検索を可能にしたもの）というものがあ

は「ここまで」と見切りをつけなければならぬ。アルファベットのYの所まで見出し語があっても、そこで終わっている辞書はあり得ないのである。

辞書の形態も多様となった。

言うまでもなく、電子媒体による辞書の登場である。かつては辞書と言えば、紙でできているのが当たり前であった。現在、教室で学生が使っている辞書は、ふつう電子辞書である。スマホの辞書、インターネットの辞書もある。スペースの制約のない電子媒体としての特性を活かした辞書が求められている。同時に、紙の辞書は存在意義を問われ、電子媒体の辞書との差別化が課題となっている。無料で手軽に語の情報が手に入る時代に、商業出版の辞書が今後勝てるのかという問題もある。

限られた予算と時間と人と多様な要求の中で、知恵を絞る。どこにどのくらい力を振り向けるべきか、とくに編集主幹は悩むことになる。

さて、学部長を拝命することとなった。辞書の執筆に逃けたつもりが、ふと学部をめぐる状況も辞書のそれと似ていることに思い至る。予算は減る。教員

も新規採用が難しいため減少し、高齢化する。様々な業務も増えるばかりである。人文系の学問は存在意義を問われ、eラーニング、アクティブラーニングといった新しい教育・学習形態も求められている。イギリス最初の本格的な英語辞典を編纂したサミュエル・ジョンソン（一七〇九―一七八四）は、辞書編集者のことを「骨の折れる仕事をこつこつと続ける無害の人」と述べている。辞書の一執筆者としての自分は「無害の人」かもしれない。しかし、学部長としては、判断によっては「無害の人」という訳にはいかない。

* * *

ジョンソンのように、かつては一人で辞書を書き上げた人もいた。現在では一冊の辞書が完成するまでには多数の人が関わる。利用者からの指摘によって間違いが判明し、改善がなされることも多い。

人文学部も、同窓会の多くのみなさまのご協力に支えられている。引き続き、温かいご支援とご指導をお願いする次第である。

過渡期の文理学部、人文学部

岡本 明 (元人文学部助教授)



皆さん、わたしは昭和四八年春から五七年秋まで、富山大学文理学部、ついで人文学部に在職した西洋史の者です。五七年十月に広島大学文学部に移りましたが、その後も富山、高岡、富山大学を合計四回ほど訪ねました。一番最近は五年前の日本西洋史学会全国大会の折です。人文学部校舎の中に入りました。服部良久さんは後任者です。服部さんは京大へ転任後、まだ現役の身で大会に参加されたわけで、衆望に応え大会懇親会でのスピーチをされました。

私は広島大学も定年退職しており、人知れず、ささやかに文理学部時代の卒業生で、卒業後高校教職をしつかり勤め上げられる直前だった北岡・坂田両君らと同窓会を開きました。超ミニでもこうやって会えるのは嬉しいことです。

また、奈良から大会に参加していた人文学部第一期生の高木さん(当時)とも会いました。いまなお、富山を尋ねる機会がまたあればなあと探っています。富山大学には三十歳から三十八歳の途中までいたわけですから激しい経験や想い出も色々あります。その二つ三つを紹介します。

新学部発足後、幾年かかけて学科の充足が進み、面目を一新しました。

「人文学部の会議は長い」と事務室では評判でしたが、二階から四階までのコンパクトな校舎内だったので学科を超えた人的往来は活発でした。フランス語・ロシア語の交換授業もまる一年しましたが、後の方は「ロシア語をずっとやりましょう」との矢沢先生の言を尊重することになりました。

夏休みは旅行を楽しむことが多く、県内、金沢はもちろん、信州(大町、軽井沢、清里、菅平)、佐渡島などへよく行きました。文理学部時代は括りが史学科だったので、非常勤講師との懇談や、学生コンパなど日本史・東洋史・西洋史全体でやることが多く、金沢大学中軸の北陸史学会もあって、幕末・明治維新への関心もこの頃強まってきました。

このことは広島大学へ移ってから益するところ多く、シンポジウムを三学科共催でおこなう伝統の広島史学研究会の空気にもすつと馴染めました。江戸時代儒学者のご子孫(頼祺一教授)からは「岡本は西洋史とし

ては希有なほど、日本史に関心の強い男だ」と評されたものです。

人文知コレギウム

人文学部は富山県的人文知の拠点として、教員による公開研究交流会を二〇一七年六月から定期的に開催しています。

「コレギウム」はラテン語で「仲間たち」の意味で、毎回、様々なテーマで最新の研究成果が語られ、他学部を含めた教員間や学生、一般参加者との質疑も刺激的です。

昨年及び今年三月、その成果が『人文知のカレイドスコープ』(富山大学人文学部叢書Ⅰ及びⅡ)として桂書房より上梓されました。カレイドスコープ(万華鏡)のように多角的に「人」のあり方に迫っています。書店にてお求めいただけます。(千五百円+税)

コレギウム開催案内は人文学部のホームページをご覧ください。



(広島市在住)

大学での学びに感謝

谷崎 善 英 (38回日本史学)



富大を卒業して、早や二十九年が経過した。故郷福井で教職の道に就き、現在は小学校で教務主任を務めている。

一九八六年に入学して間もなく、大学生協の書店で江口圭一先生(当時愛知大学教授)の『十五年戦争小史』を手にした。本書との出会いで、「日本史学コース」専攻を決意した。楠瀬勝教授・榎本謙周助教授(当時)のご指導を受け始めた一九八八年六月、「殉職自衛官合祀拒否訴訟」で、最高裁は原告逆転敗訴の判決を出した。夫を自ら信じる宗旨で追悼したいという妻の心情は認められなかった。浄土真宗本願寺派の僧籍を持つ私は、歴史と宗教・政治の矛盾を考えさせられた。今も忘れることができない。

楠瀬教授・榎本助教授のご配慮で、一九八八年に木坂順一郎先生(当時龍谷大学教授)の特別講義を受講できた。木坂先生の「アジア・太平洋戦争」呼称提唱のご説明、丁寧な史実検証等、巧みなご講義に感銘を受けた。以後、卒業論文作成に当たっても、大学の枠を超え、ご指導をくださった。私の披露宴にも駆けつけてくださった。現在でも年賀状をくださる恩師である。

戦争に至る原因の一つは、相手国民の人権を軽視することと捉えている。昨年は明治維新一五〇年であった。「福沢諭吉が唱えた『脱亜論』は、中国・朝鮮の人々を野蛮な存在と決めつけ、多くの知識人が追随し、孫文の言う『霸道』を日本は選択してしまつた。一方、勝海舟や田中正造は、中国・朝鮮の人々や鉱毒被害者の側に立ち、本当に野蛮な心を持つのは、日本人自身だと反論した。」(『朝日新聞デジタル』二〇一八年八月二十二日)

教育の現場で、歴史から学ぶことや、基本的人権尊重の大切

さ等を教え子に伝えている。「かつて日本は、中国・朝鮮の人々の人権を軽んじ、戦争に突き進み、過ちの道を選んでしまいました。友達の人権を軽視し、傷つけることはいじめです。みなさんは、周りの人の心情に寄り添っていますか。みなさんの中に野蛮な心はありませんか。」

二〇一四年から二年間、福井県教職員組合執行委員として勤務した。組合勤務が、大学での「人権尊重・平和希求」の学びを結実する実感があつた。労働や教育条件の整備充実に取り組み中で、教職員のメンタルケア環境改善のため、小矢部市の北陸中央病院で北陸三県の諸先輩方と語り合ったことも思い出深い。また、連合福井・石川・富山管内在住の子どもたちを「ロシア子どもキャンプ」で引率した。平和の尊さを参加者の前でスピーチする機会にも恵まれた。

卒業後の歩みは、日本史学コースでの学びなしにはあり得なかった。感謝の念でいっぱいである。今後も、「生死出づべき道」を求め、これまでの学びを生かし、教員として、住職として、務めを果たしていきたいと考えている。(鯖江市在住)

研究室から

心理学

心理学コース教授

喜田 裕子

卒業生のみなさまには、ますますお元気で過ごしのことと拝察申し上げます。心理学コースは平成五年の開設以来、今年で二十五年目をむかえました。卒業生の進路は、公務員(警察、市役所、裁判所、児童相談所等)から一般企業、スクールカウンセラーや病院等の心理職、大学の教育研究職など幅広く、卒業生のみなさまのご活躍ぶりに触れるたび、いつも元気づけられております。また太学で修得された心理学的洞察力やコミュニケーション能力は、職業生活だけでなく、ご家庭や地域社会においても、実践的に役立てられていることと存じます。



気鋭の研究者です。開設当初からの伝統である、心理学の幅広い体系的な基礎知識の修得と、心理学実験や調査を通じた体験的学習を重視する姿勢は今も守られています。さらに、アクティブラーニング等の工夫も取り入れながら、学生の主体的な学びを応援しています。二年生では、心理学の基礎的な実験や調査、検査等を、それぞれが実験器具や心理検査を手に取りながら学んでいます。三年生ではさらに発展的な研究法を学びつつ、各自の関心あるテーマに沿って研究を進め、卒業研究につなげています。

現在の心理学コースの教員は、平成十四年に着任された黒川光流准教授(社会心理学)、平成十五年に着任した私(臨床心理学)、そして平成二十四年には坪見博之准教授(認知心理学)をお迎えし、三名体制となつています。

坪見先生は「注意」や「意識」に関する認知科学的アプローチが専門で、神経科学的手法も駆使したご研究が斯界の注目を集める

的に心理学を学ぶ機会も準備されており、現代社会のこころの問題への応用にも関心を深めながら学んでいます。心理学教室のホームページにも開設されています。更新頻度は高くありませんがご覧いただければ幸いです。

卒業生のみなさまのご活躍は、教員や学生にとって大変励みになります。ぜひお気軽に近況をお聞かせいただければ幸いです。

教員という仕事の醍醐味

高野 靖彦 (28回院・歴史文化)



外野の奥までボールが飛ぶようになり、生徒が褒めてくれ嬉しかった。

「高校の教員をしています」と自己紹介すると「それは大変な仕事ですね」と言われることが多々ある。確かに部活動等で民間企業より休日が少ない仕事だが、意外と「きつい仕事」と思ったことはない。おそらく日々の授業や校務に身体が慣れてしまっているからだろう。

初めて赴任した高校で野球部の顧問になった。テニス畑なので専門外。しかも世間の注目度が高い高校野球。練習を見てみると、ベテランの監督から「守備練習が手薄なので、先生ノックしてください」と頼まれた。やり方は当然分らない。ところが生徒から「先生、練習したるでできるよ。付き合うよ」と誘われ、それから外野ノックの特別の日々が始まった。数か月後

博物館へ学芸員として出向する機会があった。常願寺川砂防百周年や外国人登山の企画展示を担当。さらに内閣府中央防災会議の小委員会の委員にも委嘱され、研究報告書を執筆した。

一旦は高校現場に戻ったが、今度は立山博物館へ出向した。学芸課で広報・教育普及を担当し、「立山×地獄展」を手がけ、県内外の来館者に出会い、仕事充実にしていた。そのなかで専門的な知識と技能が必要になり社会人枠で本学人文科学研究科へ思い切って入学した。博物館の仕事と大学院の単位取得を並行するのは苦労したが、歴史の専門性を高めることができた。博物館が好きになり現在縁あって再び立山博物館で働いている。

教員という仕事は、自分を大きく成長させてくれる。気付かなかった自分の一面も発見できる。そしてそうした人生の喜びを生徒から教えてもらうことが多いように思う。

一番感動するのは卒業式。この日は「教員をやっている良かった」と心から思う。私が担任したクラスの生徒にいつも言っていることがある。「苦しいときこそ成長しているのだ。苦しみから逃げるな」。

教員という仕事は苦しみもある。けれども、生徒と共に成長できる仕事は他にないと思う。十数年前に立山カルデラ砂防

『安政飛越地震の史的研究』を出版し、休日はとやまふるさとマスターとして講演活動を行っている。活動の中で教え子と意外な場所であったり出会うことがある。むこうから「高野先生、お久しぶりです」と挨拶してもらえらる。立派に成長した教え子の姿を見るたびに自然と顔がほころぶのである。

(富山市在住)

研究室から

ロシア言語文化

ヨーロッパ言語文化コース准教授

武田 昭文

ロシア言語文化分野は二〇一九年三月をもって中澤敦夫教授が定年退職となり、この春から武田(ロシア近現代文学)とマルガリータ・カザケーヴィチ教授(ロシア語教育学)の教員二名体制で、教育・研究活動にあたっています。現在の在籍学生は、大学院生一名、学部四年生五名、三年生二名、二年生三名の合計十一名です。年度によって推移はありますが、例年学習意欲の高い学生を迎えて少数精鋭を期した専門教育を行っています。



本研究室のすでに伝統ともいえる特色となつているのが、海外の学術交流協定校への留学です。大学間協定を結ぶノヴォシビルスク大学、

また部局間協定を結ぶモスクワ言語大学との留学生の派遣・受入れを積極的に行い、受入れ面では、二年生の演習からロシア人留学生と共に授業を受講できるようにし、派遣面では、基本三年生の後期から協定校への半年ないし一年の留学を後押ししています。その結果、十一名の学生中六名(四年

生以上の全員)が、留学または短期研修の経験者という「高留学率」を実現しています。

関連して、留学体験や、ネイティブ教員の熱心な指導によってロシア語運用能力を高めた学生たちが、毎年のように全国規模のロシア語コンクールで上位入賞し、富山大学長から学生表彰を受けています。

こうした「正の連鎖」のおかげで、本研究室では三・四年生対象の「ロシア文化論」「ロシア言語文化特殊講義」の二つの講義系科目を、ネイティブ教員がロシア語で講じるという高いレベルがずっと維持されてきました。日本人教員が一人減員した新体制でも、この良き伝統と特色は何としても守っていかなければならないと思っています。

この他に新しい試みとして、日露近代史の文化研究に教育をあげ、二〇一七年度には国際文化論コースと合同実習「長崎への旅」を行いました。参加者にも好評で、今後も同様の実習を企画していきたいと思っています。

最後になりますが、卒業生の皆様のご活躍は、教員や学生にとって大変励みになります。機会がありましたら、ぜひ研究室にお立ち寄りいただき、近況をお聞かせ下さい。

報告

平成三十年度

同窓会総会

日時▽平成三十年七月七日(土)

会場▽ボルファートとやま

磯部裕子学部長の挨拶では、「人文知コレgium」とその成果をまとめた『人文知のカレイドスコープ』（桂書房）の発刊が紹介されました。

続いて議事に入り平成二十九年度業務報告、事業報告、決算報告が承認されました。次いで平成三十年度事業及び予算案について審議し、原案通り承認されました。

次に役員人事案の協議に入り、原案通り承認されました。藤田万梨恵さん（六十六回言語）、桑原菜緒さん（六十六回国際関係）の二名が新たに理事に就任されました。



総会後、人文学部教授鈴木景二先生による記念講演「土器に書かれた平安時代の仮名について」を拝聴しました。

「千年前の仮名を読む」と題した二〇二一年の講演を踏まえ、その後の出土文字資料の概要と研究成果をお話しいただきました。

九世紀後半の仮名成立期については説明が進んでいないなかにも、墨書土器を嵯峨源氏国司の遺物と捉えることができることを語られ、最後に個別資料研究の進化、仮名文化をめぐる全体的検討などが今後の課題で、さらなる資料の出土を期待したいと結ばれました。

総会には、ミシガン州カラマズー大学で教鞭をとられる杉森典子さん（二十九回英文卒）も遠路参加され、旧交を温められました。

引き続き懇親会も開かれ、和やかに終了しました。

報告

第七回

人文の集い

日時▽平成三十年十月二十七日(土)

会場▽富山大学人文学部



「学ぶことで開ける世界
—アフリカ文学と
絵本から—」

講師 アフリカ文学研究者
村田はるせ氏

（五十回英文卒）

村田さんは富山大学卒業後、東京外国語大学大学院を修了されました。その後も西アフリカのフランス語圏諸国の文学や絵本を研究しておられます。

現地の子どものための絵本は各国が独立した一九六〇年以降に出版されましたが、出版数が増加したのは一九九〇年代以降

でした。「読むことの楽しさを語る絵本」「学校の外での遊び」「学校に行きたい女の子たち」「（娘の就学に）反対する父親たち」など様々なテーマの絵本にふれ、アフリカの子どもたちの現状と困難な中でも多様な絵本が出版され、学ぶことが広がっていく状況を話されました。

最後はコートジボワールの作家ファトゥ・ケイタの小説『抵抗する女』を取り上げ、学ぶことが自分の世界を開いていくことを実感した女性の力強い文章で締めくくられました。

先生方のご協力で学部学生も十人あまり参加し、昼食懇談会では学生からも質問や率直な感想がありました。



理事会

平成三十年度

第一回 平成三十年 六月二十日

第二回 同年九月二十六日

第三回 同年十二月二十日

理事会についてはホームページをご覧ください。役員名簿等も掲載しています。

平成三十年度

同窓会連合会報告

○第十一回総会

平成三十年七月十九日(木)、富山電気ビルにて開催され、総会では寺林同窓会連合会会長の挨拶の後、二十九年度の事業、会計決算、会計監査に関する各報告に続き、三十年度の事業計画、会計予算案が審議・了承されました。続いて清水隆司氏による記念講演「医薬品を取り巻く環境の変化の事例とこれからのモノづくり戦略の方向性について」が行われました。

続いて行われた懇親会では、前年度の連合会設立十周年記念事業による富山大学への寄付目録が寺林会長から遠藤学長に贈呈され、和やかな雰囲気の中に幕を閉じました。

○第十一回ホームカミングデー

平成三十年九月三十日(日)、五福キャンパス・工学部の担当で開催され、学長、学部長挨拶の後、都市デザイン学部長・渡邊了氏による「都市デザイン学部が目指すもの」と題する講演が行われました。その後、講義棟、創造工学センター、総合教育研究棟などを見学し、生協工学部食堂にて懇親会が開かれて終了しました。（詳細は同窓会連合会のホームページをご覧ください。）

人文学部のあゆみ 第四回

―新制大学のはじまり―

富山大学准教授 入江 幸二

戦後まもなくGHQが招聘した米国教育使節団は、一般教育が弱く職業的色彩が強い戦前の高等教育を批判し、高等教育を少数者の特権ではなく「多数者のための機会」とする方針を打ち出すとともに、自由な思考と職業的訓練の基礎とするため

の大学は「決して恵まれたものとはいえない運命を荷って」いたが、昭和二十四（一九四九）年に「将来の大成を期して」その一歩を踏み出した（翌年九月二二日、富山大学長島山喜一「東洋史・渤海史」による開学式祝辞より）。

「もつと広潤なる人文主義的態度が養成さるべきである」と指摘した（『米国教育使節団報告書』）。そして諸学校を統合しながら各県に一つ以上の国立大学を設置する原則がたてられた。

開学当初の文理学部は、文学科（教員数一九、以下同じ）・理学科（一二）・経済科（四）で構成されていた（経済科は二

富山では富山師範・青年師範・富山薬専・高岡工専・旧制高校の五校が母体となって、教育学部・薬学部・工学部・文学部からなる新制富山大学が発足した。大学昇格をめぐることは各校間の意見調整に手間取り、議論が深夜に及んでなおも決着がつかないことも度々あったという。また戦災によって失われた学舎もあり、生まれたばかり

の大学は「決して恵まれたものとはいえない運命を荷って」いたが、昭和二十四（一九四九）年に「将来の大成を期して」その一歩を踏み出した（翌年九月二二日、富山大学長島山喜一「東洋史・渤海史」による開学式祝辞より）。

報告

卒業祝賀会

日時▽平成三十一年三月二十六日（木）
会場▽ホテルグランテラス

人文学部同窓会は例年、富山大学卒業式・人文学部学位記授与式に引き続き卒業祝賀会を開催しています。本年も磯部裕子学部長をはじめ恩師の先生方や盛装した学生たち、同窓会役員が集いました。参加者は記念撮影などそれぞれ

に名残を惜しみつつ、会場は華やかに盛り上がりつつ、会場は



なお昭和二年に組織された旧制高校・文理學部の親睦組織「眞率会」は今も残り、教職員に懇親の場を提供している。



蓮町キャンパスの講堂と史学教室（昭和29年）
（富山大学アーカイブズ設置検討準備室提供）



新刊案内

人文学部ゆかりの方々の新刊を紹介します。

- 〈軍〉の中国史（講談社学術文庫）
澁谷由里（元教員）著 講談社刊 2017年1月
- 馬賊の「満洲」―張作霖と近代中国―（講談社学術文庫）
澁谷由里（元教員）著 講談社刊 2017年6月
- 陰陽道叢書 2 中世 新装版
村山修一、下出積興編 富田正弘（名誉教授）ほか執筆 名著出版刊 2017年6月
- 大伴家持 ― 波乱にみちた万葉歌人の生涯（中公新書）
藤井一二（12回文学卒）著 中央公論新社 2017年6月
- アメリカ文化事典
アメリカ学会編 赤尾千波（教授）、小野直子（准教授）ほか執筆 丸善出版発売 2018年1月
- 救いはどこからくるのか 思索集 1
田畑真美（教授）著 一粒書房 2018年2月
- 夜明けか黄昏か ポスト・ソビエトのロシア文学について
ガリーナ・ドットキナ著 荒井雅子（36回露文）訳 群像社 2018年2月
- 関西弁事典
真田信治監修 中井精一（教授）ほか執筆 ひつじ書房刊 2018年3月
- 北斎川柳 五七五で描いた北斎漫画の世界
田中聡（33回文化構造論卒）著 河出書房新社 2018年3月
- メルロ＝ポンティ読本
松葉祥一ほか編 澤田哲生（准教授）ほか執筆 法政大学出版局 2018年3月
- 書物の文化史 メディアの変遷と知の枠組み
加藤好郎ほか編 藤本幸夫（名誉教授）、磯部佑子（教授）ほか執筆 丸善出版発売 2018年4月
- としゃかんやさん カモシカととしゃかん その2
魚瀬ゆう子（25回国文学卒）文 水上悦子絵 舟橋村（発行）桂書房（発売） 2018年7月
- 立山信仰史研究の諸論点
米原寛（14回文学卒）著 桂書房刊 2018年11月
- 明治維新の「嘘」を見破るブックガイド
田中聡（33回文化構造論卒）著 河出書房新社 2018年11月
- 差別論 偏見理論批判（明石ライブラリー）
佐藤裕（教授）著 明石書店刊 2018年12月
- 渤海王国と古代日本
藤井一二（12回文学卒）ほか著 城西国際大学刊 2019年3月
- 人文知のカレイドスコープ（富山大学人文学部叢書Ⅱ）
富山大学人文学部編 桂書房刊 2019年3月

令和元年度人文学部 総会のご案内

初春の今月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、…

「令和」元年、何事も新たな出発の刻、人文同窓会も新たな気持ちで会員の皆様に一層のご理解とご支援をいただけるよう、「人文の集い」や「総会・講演会」などの企画を進めていきたいと思ひます。多数の皆様にご参加いただきたく、ご案内申しあげます。

人文学部同窓会長 米原 寛

日時 令和元年 7 月 6 日(土) 総会 午後 1 時 30 分～ 講演 講師 富山大学名誉教授 松崎 一平
講演 午後 2 時 40 分～ 演題 「内省的探究における
場所 ボルファートとやま (富山市奥田新町 81 TEL076-431-1113) 超越的人格の出現について」

講演要旨

アウグスティヌス (354-430) は『告白』第八巻で、386 年夏、ミラノでのカトリック・キリスト教への回心を回想しています。それによると、厳しい内省のさなかに「貞潔」が出現し、彼を力強く回心へと誘います。『ソリロキア』では、どこからか出現した「理性」が、独り思索するアウグスティヌスと対話を試み彼を導きます。『哲学の慰め』では、牢獄にあっておのれの運命を嘆くボエティウス (480 頃-524 頃) のまに「哲学」が出現して議論を導きます。内省的探究 (あるいは葛藤) におけるこのような超越的人格 (みな女性です) の出現の意味を考察し、西欧的知の特質の一つというべき、内的探究の枠組みをいくらかでも明らかにすることをめざします。

懇親会：午後 4 時～ 会費：5,000 円 (当日受付でお納め下さい)

お知らせ

第八回人文の集い

講演：住めば都

ーオハイオでの二年間ー

講師：大江ひとみ

(44 回比較文学)

期日：十月二十六日(土)

午前 10 時～11 時 30 分

会場：富山大学人文学部一階

第一講義室

概要：夫の転勤に伴って、子ども二人と米国オハイオ州で今年三月までの二年間を過ごしました。小学校や図書館でのボランティアや、趣味の活動を通じて感じた現地の暮らしを写真とともに振り返ります。

終了後、十一時五十分より隣接の第二講義室で昼食会を開きます。

講演は参加費無料ですが、ご参加できます。昼食会は会費二千円 (学生五百円) です。どちらか一方だけの参加も可能です。

総会、人文の集いとも同窓会事務局へお申し込みください。

同封ハガキもご利用ください。多くの方のご参加をお待ちしています。

「人文同窓会」の役割と

お願いについて

「初心忘れるべからず」

(世阿弥)

この諺の本意は、来し方に鑑み、今の己を自覚し、行く末の自分に活かすこと。このことは自身にとっても社会生活にとっても肝要と考えます。人は往々にして今のこと、人間関係でいえば「ヨコのつながり」は大切にされるものの、「タテのつながり」は案外に無頓着かもしれません。しかし「タテのつながり」こそ先輩の知力を吸収し、今の自分に活かすことに有為です。また今の自分の力を後輩に伝えていくことも、これからの社会の発展に意味のあることと思ひます。であるからこそ、学舎を共に過ごした先輩と後輩を結ぶ「同窓会」の存在が意味を持つのだと思ひます。そのために同窓会名簿が必要だと考えます。

人文学部同窓会は、先輩、後輩との結びつきに、微力ながら出来る限りの役割を果たしていきたいと思ひます。

会員の皆様には、人文同窓会に一層のご支援をお願いいたします。

富山大学人文学部同窓会

会長 米原 寛

人文学部教員異動

退職 (平成 31 年 3 月)

○松崎 一平 (人間学)

○中澤 敦夫 (ロシア言語文化)

転出 (平成 31 年 3 月)

○小谷 瑛輔 (日本文学)

明治大学へ

謹んでご冥福をお祈り致します。

一 訃 報

犬島 敏明 (4 回史学)

平成 31 年 4 月 11 日

木俣 広明 (27 回哲学)

平成 30 年 2 月 8 日

黒瀬 哲夫

(2 回国文及び中文)

平成 29 年 1 月 8 日

中島 良夫 (7 回英文)

平成 28 年 7 月 19 日

宮田 正義 (17 回国文)

平成 31 年 1 月 28 日

年会費の報告

年会費納入状況をお知らせいたします。平成 30 年 6 月～平成 31 年 3 月まで、240 名の方々から 303,000 円の年会費を納入していただきました。ご支援、ご協力を厚く御礼申し上げます。

編集委員

田中 史子

谷口 恵子

成瀬 裕美子

山田 恵美

山藤 登

山本 孝一

畠山 節子